

■ デニムの帽子～鹿島槍ヶ岳・赤岩尾根での滑落～

“オーイゆっくり見てたらこちらもお世話になっちゃうぞ～”メンバーに檄を飛ばすと一行はまたぞろ登り始めた。1994年4月30日、以前に属していた会の春山合宿で鹿島槍ヶ岳の複数のルートを登る為、昨日信濃大町から大谷原に入り西俣の出合にテントを張った。メンバーは男性4名女性7名、会創設3年目、どういはずみか代表に祭り上げられた私がリーダーを務め、技術指導者にベテランの先輩の助けを借りての山行だった。その日は赤岩尾根を登り鹿島槍の往復と決めたが一般ルートを登るのも興なしとの事で一本手前の枝尾根を登った。雪やブッシュをかき分け倒木を乗こし大岩を登り、道なき尾根を悪戦苦闘の末、高千穂平の手前で赤岩尾根に合流した。尾根道に出て視界も開け布引山、鹿島槍、東尾根、南には八ヶ岳と、体を使って登る者たちだけに与えられた感動に酔いしれていた。するとヘリが西沢の上部、爺が岳北峰直下へ到来し、何度か旋回の後ロープで三人が下され遭難者を収容していったのだった。

翌5月1日夜半に降った雨は上がり濃霧の中出発したのだが、北よりの風と途中から降りだした曇に頬を打たれ辛い登頂になった。

登頂を終えて下山に掛かった。元気なメンバーが先に出て冷乗越から赤岩尾根にフィックスロープのセットのため出かけて行った。少なくともそこまでは技術的に問題になる所は無いはずであった。すると途中で先輩が立ちつくし「Fさんよ～」と気落ちした声、「Oさんが滑ってよ～」と言っている。左の黒部側に20メートル位滑落し、幸い小ブッシュに引っ掛かり止まったようで大事は無かった。雪の下の石か木の根にでも躓いたのか、何でこんな所で思うも雪山では気が抜けない。

やがて分岐点、上から見ると流石に急斜面だ。尾根上の這松に50メートルロープを結び一人ずつ降りて行った。最後に残った私が這松から解除したロープを自分のハーネスに結んでいた時に弛んでいたロープが下から引かれた。もう一段下にルートを伸ばすために必要なのかしらん。トランシーバーで連絡するとハーネスに結んで降りて来るようにとの事、必要性ではなくロープの重さで引かれたようであった。

皆が問題なく降りたのだからと新米リーダーの甘い判断で一步、二歩と踏み出した足は、腐れ雪に潜り込み体が後方にのけ反り尻餅をついて滑り出した。すかさず体を反転させて滑落停止を試みるがピッケルも糠に釘同様に何の抵抗もなく体が反転し滑り落ちていく、三度目の滑落停止姿勢でようやく止まったと思った。腹這いのまま見るとブッシュの穂先が何本か雪から顔を覗かせていた。と、その瞬間足先から滑り出し、スピードが増してスキーのジャンプ台の先端のシャクリから飛び出すように体が持ち上げられたかと思うと西沢の空中に飛び出した。怖いという気持ちはなかった。ロープは仲間が確保しているはずだし、そのうちに大きなショックを受けて止まるのだろう。頭の中ではそんなことを考えていた。長年の雪庇の崩壊等で削られ大きな凹凸の無い細かくひび割れた岩肌が流れるように飛び去るのが見えた。たかだか2～3秒の出来事がずいぶん長く感じられ、20年を過ぎた今日でも鮮明に記憶に残っている。予想外に軟らかい衝撃で体は逆さまになって停止した。当時はシットハーネスを着用していた。岩に激突するでもなく軟着陸したような感覚だったのは、ロープが伸びて停止した場所と岩の傾斜面が一致していたのであろうか。

体を回し上下を直し、慎重に足場を選んで安定させ仲間に連絡せんと、首に吊るしてある無線機を取り上げると電池パックが外れて無くなっていた。上方から声がした「Fさん、大丈夫か」。見上げるとロープがUターンしている大きな樺の木の根元まで先輩が駆け上がって声をかけてくれていた。脱出し

ようと登り始めると「そこから右へトラバースすればいいよ」との声で右を見ると全員がロープで降りた場所のすぐ近くであった。中間点にあった樺の木にロープがかかり振り分け荷物のようにになっていたのだ。20メートル強の自由落下をしたのだらうと想像できた。体はどこも痛みは感じられなかったが頭のとっぺんが切れたらしく愛用していたデニムの帽子が血で染まっていた。

そこから、尾根を降りずに西沢を下ったが雪の急斜面は気が抜けず、あそこまで下れば緩傾斜になるように見えても、そこまで行くとまだ長い急傾斜が続くのだった。

もし、取付上部でロープを外して下っていたら大滑落を引き起こし、この斜面の露出岩に何度も激突し息絶えていたことだろう。仲間や家族その他多くの人々に計り知れない迷惑をかけるはめになっていたのだ。

テント場に着くとこの二日間で雪解けが進みテントだけが20センチもかさ上げされて主人達の帰りを待っていた。それぞれが手分けをし、食事の支度、ささやかな焚火を熾すものと、こまめに働いた。自分は河原で帽子に着いた血をつまみ洗いたが、時間が経過していたためか全く落ちなかった。



帽子の思い出が甦ってきた。

その年の前年の五月連休に手造りヨットで独り伊豆大島に向かった。昼間風いでいた海は夕刻が近づくくと大荒れになり、波頭は崩れ白い泡が筋を引いて勢よく流れ、島の木々の葉が風に煽られ“来るな、帰れ”と旗を振っているように見える。島を回り込んで港はまだ先だった。向かい風で船は進まず、来た航路を引き返すことにした。島を目前にして10時間もかけて来たのに、嵐の中、引き返すのは気が重かったが、何時止むか分からない風を待つ訳にはいかなかった。とりあえずセールを下ろそうと前のデッキに這って行き作業をした。被っていたデニムの帽子が短いツバに風をはらんで飛ばされるようなら自分は遭難するだろうと思った。船を風下に廻すと飛ぶように走り島は瞬く間に遠のいて行く。

陸上では到着の連絡が来ないためにヨット仲間が横須賀の保安庁に出かけ捜索ヘリを出すか否かで判断を迫られて、一晩だけ待つことにしようとするようになっていたのだ。

暗くなって皆テントに入り食事を始めたらしい。私は一人今日の出来事を自省と共に思い返しながらか、焚火の始末をしていた。残り火も少なくなってきた燠の上に帽子をくべた。この何年か様々に付き合ってくれて思い入れも大きかったのだが、家には持ち帰れなかった。

しばらく燠っていたがパッと火が付き、かざしていた手や頬を茜色に染めてメラメラと燃えくずれていった。